

目的. 夫婦家族制イデオロギーや核家族化が進行しているが、依然としてく女性は男性よりも親子関係への固着が強く、親子中心の家族意識をより強くもっている>と考えられ、老人は他の世代に比べて直系家族制志向が強く、保守的な家族意識をもっている>ことが自明視されている。また、く夫婦家族制と直系家族制が競合的に並存し、家族意識に一貫性がない>という問題指摘もなされているが、これらの定説的な見解は十分検証されてはいない。そこで家族意識の諸側面についての調査データをもとに、夫婦家族制イデオロギーの強弱の程度を比較考量しながら性差と世代差の有無や特徴を分析した。

方法. 分析に用いた資料は、1982年5月～6月に大学生と中年夫婦を対象に、同年9月に60歳以上の老人を対象に、主として老年期の性と結婚の問題を考察する目的で実施した調査データの一部である。分析標本数は男子学生388人と女子学生415人、中年夫婦486組、老年男性247人と老年女性169人である。

結果. 大学生と中年にのみ共通4項目と三世代共通7項目の中にも、大学生と中年では「結婚相手選択の主体性」に関してのみ、老人はそれに「望ましい家庭のタイプ」を加えた2項目でしか上記の命題を裏証する形での性差は認められなかった。老人が保守的な家族意識をもっていることは大学生との比較では明確に把握されるが、現在子育て期にある中年夫婦は親子中心の家庭がよいという者が6割を占めて老人より多く、逆に夫婦共通の趣味をもつ協力の必要性を大いに認める者が4割前後で少ないなど、中年夫婦との比較では妥当しない。親子中心か夫婦中心かの違いによる意識の差は三世代ともあまりない。